

1 研究主題

自ら学び続ける児童の育成
 ～根拠をもって自己の考えを表現する対話活動を取り入れて～

2 研究仮説

児童の話す・聞くスキルを高め、課題を追求する過程において、根拠をもって自己の考えを表現する対話活動を設定することによって、児童は自己の考えと他者の考えをつなげ、学びを深めることができるだろう。

3 研究の主なあゆみ

日程	内容	備考
1学期	研究主題、副主題、研修計画の立案 各ブロック仮説・仮説解明の視点共有 対話スキル・話型の作成	
7月27日	特別支援教育研修 「学校全体で取り組むポジティブ行動支援」	講師：臨床心理士 松田 敦子 様
9月27日	高学年ブロック全体授業 算数科 5年 「面積」	講師：周南市教育委員会学校教育課 指導主事 小林 弘典 様
11月17日	低学年ブロック全体授業 国語科 1年 「いろいろなふね」	講師：山口市立大歳小学校 教諭 宮野 大輔 様
1月27日	中学年ブロック全体授業 音楽科 4年 「山の魔王の宮殿にて」	講師：周南市立沼城小学校 校長 久保田 智子 様
2学期 3学期	各ブロックの仮説解明の視点を生かした一人一授業	

4 研究の実際



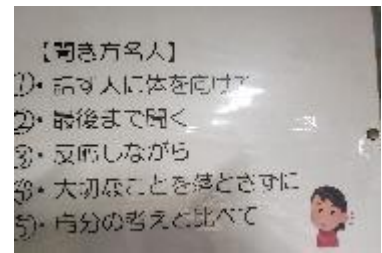
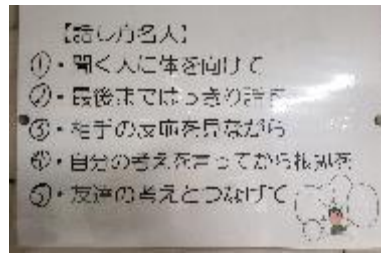
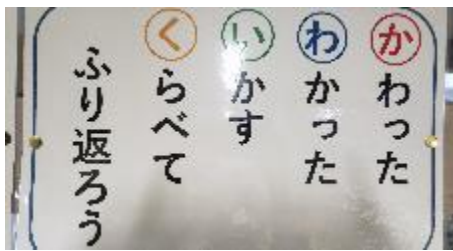
校内研修
 授業後「対話活動」について、
 教員もタブレットを活用しながら
 が深め合う教員



第5学年 算数科
 タブレットを活用し、意見を
 交わす中で深め合う児童



第6学年 音楽科
 音を頼りに、感じ取った曲想
 について音楽の構造と結び付
 けながら考える児童



振り返りのポイント、対話スキル「話し方名人・聞き方名人」

各ブロックで内容を考え、学級に掲示している。教科を問わず様々な場面で指導

【参考資料】北見市立北小学校 春日井市立出川小学校他

5 研究の成果と今後の課題

〈成果について〉

○対話スキルの向上、根拠をもって自己の考えを表現

話型を用いて自分の考えを話したり、自分の考えと比べながら友達の考えを聞いたりする場を多く設定し、定期的に振り返りを行うなど、対話スキルの定着を図ってきた。これにより根拠をもって話そうとする児童は増えてきた。意見を述べる際、「根拠」（誰が見ても明らかな証拠資料・事実やデータ・文・言葉・グラフや図表に示されていること）をもって表現することで、より具体的で説得力が増し、聞く側にも考えが伝わりやすくなる。そのため、結論→根拠・理由「私は～と思います。」「なぜかという～です。」という話型を示し、意見と根拠を区別し、結び付けて表現できるよう努めた。また、友達と話し合うことで、自分の考えに自信をもつことができ、一斉学習の場面でも積極的に発言する児童が増えたように感じる。また、ICTを活用することで、記入したことを見せ合ったり送ったりして、対話活動をより円滑に進めることができた。

〈課題について〉

○対話活動の質の向上

対話活動は手段であり、あくまでも目的は3つの資質・能力（学びに向かう力・人間性、思考力・判断力・表現力等、知識・技能）を育むことである。しかし、本校では対話活動が児童同士の伝え合いや教師と児童の対話にとどまっているのが現状である。対話活動を通じてより主体的に課題を解決したり、互いに深め合ったり能動的な様子が見られることはあまりなかったように思う。

〈来年度に向けて〉

○来年度に向けて

来年度にむけて、次の2点をあげたい。

まず、さらなる対話活動の充実である。対話スキルなどを指導することで一定の成果はあったが、児童が主体的に対話する中で「新しいことに気付く、考えが深まる」までには至っていない。共通のモデル、理想の授業像を教職員・児童ともに共有する必要性を感じる。

2点目は、学習の振り返りをもとにした児童の主体的な学びについてである。児童が「何をどのように学んだか」「何ができる、分かるようになったのか」学びのスキルの積み重ねが、生きる力の育成につながる。振り返った児童の思考の流れ、思い、疑問が次の日の学習課題となり、学習が紡がれていくよう仕組んでいくことが重要であると考えます。